
彼の特別

あーゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼の特別

【Nコード】

N4171Z

【作者名】

あーゆ

【あらすじ】

大学生になつた新一たち。

ゼミ仲間の国本沙耶は新一に片想い。

彼女がいることを知ったが本人にも止められないくらいの嫉妬の渦に飲み込まれる。

蘭と新一はこのまま引き離されてしまうのか…？

彼女は片想い中

「なー、卵焼き頂戴」

「やだ」

「ほんつつとに工藤くんのお弁当っていつも見事…」

「お母さんが作ってるの？」

ゼミのグループワークのために昼休みに研究室に集まった私たちのグループは
いつの間にか話題が”工藤くんのお弁当”

「あれ？でも工藤の両親は海外にいんだろ？」

「まさか自分で！？」

黙々と、でも美味しそうに工藤くんはお弁当を食べ続ける。

みんながワイワイと”誰が作ったのか”を論議しているのを聞きながら
彼を見つめていた。

「なに考えてんのか本当にわからねーやつだなあ」
田中くんが工藤くんの頭を小突いた。

「探偵たるもの、分かりやすくてたまるかよ」

「でもお前より服部のが馴染みやすいぞ」

「じゃあ探偵としてオレは服部に勝ってるな」

田中くんは工藤くんが悪態をついているが実はゼミ生のなかで一番の仲良しだった。

彼が事件に呼ばれてゼミを休んでもきちんと課題やその日の出来事を把握しているのは田中くんが連絡をしているからだ。

「そんなことじゃー彼女できねえぞ」

どきー！

”彼女”って言葉に反応してしまった。

「…よけーなお世話だ」

工藤くんは顔色を変えず答える。

「新一は”彼女には”優しいタイプだもんなー」

声のするほうへと顔を向けるとドアにもたれかかってニヤニヤしている黒羽くんと服部くんの姿があった。

「彼女には優しいタイプ？」

私の横で美緒が興味津々という感じで聞き返した。

「そ。こいつ、他人にほとんど興味なくせに彼女のことになるとお構い無しやで。周りに見せたことない笑顔向けるしな」

「よけーなことやってんじゃねーよ」

少し顔を赤くした工藤くんは空のお弁当箱を鞆にしまい席を立つ。

「んじゃ、グループワークはそんな感じで。オレも少しまとめてみるから。お疲れさま」

「…彼女には優しいんだって、沙耶」

「からかわないですよ」

私、国本沙耶は東都大学法学部1年生。

工藤新一くんに目下片想い中…

「唯一の救いは、1年生のゼミ分け、基礎教養系は出席番号わけだから工藤くんと一緒にだけど…それだけだもんなあ…アドレスすら聞けない」

「入学してから結構経つのにまだ工藤くんと壁あるもんね。でももうすぐ夏休み！！休み中もゼミの集まりあるしチャンスだって！！」

そうか。たしかにそうだ。休み中だって会える。それにゼミ研究を口実に連絡をとることだって…

よし！！頑張るぞ

午後の講義

工藤くんの後ろ姿を眺められる位置に席をとりずっと考えていた。彼女にしか見せない笑顔、優しさはどう表現されるのだろうか。優しくされる資格が欲しい。

入学式以来ずっと見つめている
サークルにも入っていない彼はあまり女の子と話す機会もなく、おそらくゼミ研究で一緒に私や美緒が一番彼と話す女の子だろう。

彼のプライベートは知らないが学校の中では近い位置にいると思う。

頑張ってその距離を縮めたい…

「新一、今日なんか予定あんのか？」

「いや、特には。」

「今日母さんも青子も遅いらしいんだよ。飯、あやからせて〜」

「お。ええなー、オレも！！」

「ぶざけんなっ。自炊しろよ！！」

服部さんと黒羽くん、工藤さんの3人は入学前から友達らしい。とても仲がいい。

容姿も整ってるし3人そろつとより目立つ。なんだかんだ言いつつ最後は工藤くんがおれて携帯で電話をして

”黒羽と服部と帰るから、突然わりいな”なんて会話をしていた。

電話の相手は誰だろう。

翌日

工藤さんと服部くんは休みだった。

黒羽くんの説明だと

”新一にきた事件の以来に面白がって平次もついてった”ってことらしい。

「ゼミ研…工藤くんいないと進まないねえ…」

美緒がポロリと発言。

明後日仮提出なのに殆ど進まなかった。

「……………工藤の家、行ってみねえ？」

「お。いいねえ」

田中さんと木下くんがいたずら顔で提案する。

「どんな生活してるか見たいしね！！いなかったら戻ってくればいいんだし！！」

美緒も行く気満々。

田中くんが以前、米花二丁目だと聞いていたこともあり行ってみることにした。

「……………」

「表札は工藤つてなってるよ…」

「…でか」

大きな洋館はなんの苦労もなく見つかった。

「ここにひとり暮らし？どうしよう…家政婦さんとかいたら…」

ドキドキしながらチャイムを押す。

「…はい。」

「あ、工藤くん！！ゼミの田中、木下、木梨、国本です」

「はあ！？なんでオメーら…」

「突然わりいな！！あけてくれー」

田中くんがそういうと”渋々”と玄関があく。

「事件解決したなら学校来いよな。」

「さつき帰ってきたんだよ」

そう言いながら工藤くんはネクタイを緩める。事件にはスーツで向かうんだ、と1つ知れたことに頬がゆるむ。

「しかし独り暮らしなのに綺麗にしてんなあ…俺ワンルームだけど
荒れてるぜ」

木下くんが感心して見回す。

「…まあな。」

工藤くんが少し照れたように視線をずらす。

私は少し違和感を感じた

ガチャガチャ

「新一い。帰ってるの?」

「げっ!!」

「『『『『え?』』』』」

「…ごめん、友だち来てたみたいね…」

可愛らしい女の人がりビングに遠慮がちに顔出した。

だれ?

その後ろから意外な人物。

「なんだ。田中たちじゃん。」

「く…黒羽くん」

「蘭ちゃん、新一のゼミの仲間だよ」

黒羽くんが女の子に説明した。

そうすると彼女は納得したように頷く。

「邪魔してごめんなさい。黒羽くん、奥行こう!」

黒羽くんの背中を押してリビングを過ぎようとした彼女を工藤くんが制止した。

「な・ん・で・黒羽がここにいるんだよ。」

「夕飯、3人で食べようと思って。だめ?」

「ダメじゃねーけど…」

「新一は俺を飢え死にさせる気か?ま、オメーは忙しそうだし蘭ちゃん、奢るから外で飯食おうよ」

3人のやり取りに田中くんがつつこむ。

「蘭ちゃん…って言ったっけ?黒羽の彼女なんか?」

私もそう思ったけど何か違和感…

そしてそれを聞いた工藤くんの顔色が変わる。

「違うよ。蘭ちゃんは新一の彼女」

ニツと黒羽くんが笑う。

かかかか…彼女いたの!?

「あ…毛利蘭です!!」

慌てて頭を下げた蘭ちゃんはとても可愛かった。

リビングで話し合いをしている間、黒羽くんは奥でゲーム。
蘭ちゃんは私たちにお茶を出したり、工藤くんの脱ぎ散らかしたス
ーツの上着を片付けたりと目まぐるしく動く。

先ほど感じた違和感はこれだった。

綺麗に片付いている室内に対して
スーツはクシャクシャになってソファに置かれているし帰ってき
て使ったであろうコーヒーマーカーの周りには粉が落ちていた。

第三者が、工藤くんの後を追うようにして片付けをしてくれている
ことは容易に想像できた。

「新一、あたしお買い物に行ってくるね」

蘭ちゃんが遠慮がちに声をかける。

「あ…じゃあオレも…」

「だ・め!!ゼミのグループワークなんでしょ?ちゃんと新一も参

加して!!」

立ち上がるうとする工藤くんを制してお説教。

そんなことできるのは蘭ちゃんしかいないんだろっなあ…

「お邪魔しましたあ」

「またな、工藤!!」

「黒羽、あんま2人の邪魔すんじゃないぞ」

バタバタと玄関で別れの挨拶をする。

その時、蘭ちゃんが帰ってきた。

「あ、もう帰るの?」

「うん、お邪魔しました」

動揺する気持ちを隠しながら答えた。

「重そうね」

蘭ちゃんの手を見ると沢山の食材。

それを何も言わず工藤くんが奪い取った。

「…だから一緒に行くっつったのに」

ボソリと呟くそれを私は聞き逃さなかった。

「工藤の彼女、美人だったなあ」
「お似合いつて感じで」

田中さんと木下くんが話していたけれど私はそれを素直に聞き入れることができない。

「沙耶、大丈夫？」

美緒が顔を覗き込んで心配してくれる。

「…ん、平気」

嘘をついた。

平気じゃない。

みんなと別れたあと

眩いてみた。

「……………しんいち……………」

しっくりこないその呼び名。

彼女は自然と呼んでいた。

羨ましいな。

ずるいな。

嫉妬…みつともないけど

それをとめることが私にはできなかった。

2・寂しさと不安

大学に進学してから
なかなか時間が合わなくなった。

少なからず蘭はそう思っていた。

東都大学に進学した新一、快斗、平次。

米花大学に進学した蘭と青子

米花短大に進学した和葉。

それなりにみんな連絡を取っているが

今までそれぞれの幼なじみカップルは学校も登下校も一緒だったことを思い出すと

少し寂しさを感じていたことも事実だ。

「かと言って東都大学になんていく頭ないもん……」

一人で蘭は呟く。

「百面相だー」

後ろから突然声がする。

「え？」

「よ。偶然」

「黒羽くん…」

蘭の隣に駆け寄り一緒に歩く。

「お嬢さん、考えごとですか？」

「そんな大したことじゃないけど…あたしも東都大学に行ければよかつたのになあって」

風になびく髪を手でとかしながら蘭は微笑む。

「新一といれなくて寂しいんだ？」

からかい口調で快斗が言うと頬を染めながら少し睨む。

「黒羽くんは寂しくないの？」

「オレは寂しいけど青子がそうでもなさそうで悲しい」
おちゃらけて快斗は言うがきつとみんな寂しいんだと
蘭は心でそっと思つ。

でも…新一は？

そんな不安もある。

もしかしたら

大学で可愛い女の子に言い寄られるかも…

幼なじみの自分なんかすぐ飽きちゃうかも…

そんな想いが渦巻く。

「あ、そだ。蘭ちゃん昨日はごちそうさま。ありがとう」

「どういたしまして。今日はお母さんいるの？」

「それが今日から友だちと温泉だとさ」

「じゃあ今日もどう？一緒に夕食飯」

「やったね」

最近蘭は工藤邸で寝泊まりすることも少なくない。

夕飯も朝食も新一と一緒にいることが多い。

もちろん、約束していても事件に呼ばれることもあるがそれ以外はなるべく時間を共有しようとしていた。

「新一い、帰ってるの？」

いつものように合鍵で入る。その様子を「夫婦だなあ」なんて快斗がながめる。

「げ……」

「あ……」

新一の家に大学の友だちがいるのは珍しい。本当に珍しい。

「…蘭。どうした？」

食卓を3人で囲みながら新一が尋ねる。

「え…あ…うつん」

……沈黙

「蘭ちゃん、俺おかわりー」

「あ、はい。新一は？」

「いる」

パタパタとキッチンに移動する蘭を見送ってから快斗は口を開く。

「不安なんじゃねーの？」

「は？」

箸を置いて新一を見据える。

「事件でいないことも多いなか、大学が違っちゃって…寂しいってさっき言ってたぜ」

快斗がそう言うと新一も少し考え込む。

「……………オレだって寂しいよ」

「…のわりには？ゼミ仲間の女の子も家に呼んで楽しそうじゃん」
快斗はわざと蘭に聞こえるように言う。

「んなんじゃねーよ！勝手に来たんだって！！」

顔色も変えずに否定する新一。

「はーあ。わかってるけどさ…蘭ちゃんに説明してやれよ」

「わかってるって…」

「なにが分かってるって？」

笑顔でお茶碗を新一、快斗に渡す。

「今日…おっちゃんにオレが電話するから泊まってけよ。」

「…え？」

蘭は突然のことに驚いているが嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあ邪魔者はさっさと食って帰ろーっと」

食事が終わると快斗は本当にすぐに帰った。
食後のコーヒーを飲みながら2人並んでTVを見る。
その時に何気なく蘭が口を開いた。

「…新一、大学楽しい？」

「へ？突然なんだよ。蘭は楽しくないのか？」

「ん？楽しいよ。青子ちゃんもいるし。授業も楽しいし。」
「じゃあなんだよ。」

新一が怪訝な顔をして尋ねる。

「……今日来た女の子、よく一緒にいるの？」

蘭が視線をそらしながら問う。

その姿に新一は口元がゆるむのを隠しながら蘭をつつく。

「妬いてんだ？」

「妬いてないもん。ただ……」

「ただ？」

立ち上がりコーヒーのお代わりを淹れにいく蘭を目で追いながら新一はカップを空にする。

「…あの子たちはあたしの知らない新一を知ってるんだって…しかも2人とも可愛いし」

少しいじけている彼女を見て「あ…可愛い」なんて思って新一は見つめる。

「オレがオメー以外に興味ねーってまだわかんねえの？」

後ろから抱き締められて思わず少しコーヒーを溢した。

「ちょっと!! 新一危ないよ!!」

付き合い始めてから抱き締められることなんて

何回もあるけど

いまだにドキドキする…。

そんな心地よさを感じながらどこか胸騒ぎがする。

どうか胸騒ぎが気のせいであって欲しい。そんなことを思いながら蘭は新一に身を預けた。

3・視線…？

「別に一緒に出ることないのに」

お弁当を作りながらそんなこと言うがその顔は言葉と裏腹。嬉しそうだった。

「いいだろ。」一緒に登校”なんて久々で

「今日は帰りに少し園子たちとお茶する約束してるからまた連絡するね」

「遅くなるようなら迎え行くけど」

新一が真剣な顔して言うがそれが逆に面白かったらしく蘭は声を出して笑う。

「新一はあたしのお父さん？大丈夫よ！！」

ピシッとアイロンのかかった包みにお弁当を入れ新一に手渡す。

「いつもありがとうございます」

「いえいえ。いつもお粗末様です」

穏やかな時間が流れる。

「今夜…ハンバーグがいい」

玄関の鍵を閉めながらそんなことを新一が言う。

「今日はお父さんが家にいるからダメよ」

いたずら顔で蘭に言われた新一は「ちえ」っといじけた。

「だからオレは大学生になったらここで暮らそうって提案したのに……」

「だって仕方ないじゃない。お父さんが結婚もせずと同棲はだめって言うんだもの」

「……まあ。そうだけど」

本気でいじけ始めた新一の右手を握り歩き始める。

「新一、簡単に引き下がったから本気じゃないんだと思った」

「オレはいつだって本気だよ。近々もっかい交渉しに行くから」

その真剣な声に嬉しくなりながら駅へ向かう。

『なーんか…家を出たときから視線を感じるんだよな』

かと言って危害を加えてくる様子もない。

『狙いはオレはか…それとま蘭か…』

ぶつぶつ考えながら2人で改札をくぐると明るい声がする。

「おはよ!!!工藤くん、蘭ちゃん!!!」

「あ、おはよう。和葉ちゃん」

「はよ。あれ?1人?」

「うん、平次今日はお昼からやてまだ夢んなかや」

3人で電車に乗り蘭と和葉は一駅、新一は二駅乗って降りた。

「あつれー?新一早いじゃん。今日2限からだろ?」

駅から学校へ向かう途中で快斗と偶然出会った。

「蘭が1限からだったから一緒に出たんだよ」

そう言い捨てながらキョロキョロ辺りを見渡し怪しい人物を探す。

「ん?どうした?」

「...朝から視線を感じるんだよな...」

「つけられてんのか?」

快斗も真剣な顔つきになる。

「なんとも言えねえけど。」

そんな2人の空気を壊した人物がいた。

「おはよう、工藤さんと黒羽くん」

「あ…国本」

「おはよう」

さわやかに髪をなびかせながら沙耶は挨拶をした。

「工藤くん、昨日は突然お邪魔してごめんね」

上目遣いで謝罪をする沙耶。

「や…別に」

素っ気ない返事を気に止める様子もなくにつこり笑って校舎へと消えてった。

その姿を快斗は真剣に見つめていた。

「どう思うっ？」

新一は快斗に問う。

「なに？ズバツと聞くじゃん」

「たぶん…彼女じゃないかとオレは思うんだよな。確信はねーけど」

「めずらしーじゃん。確信もなく疑うなんて。」

「狙いはわかんねーけど…」

「まあ。これは俺の勘だけど…蘭ちゃん、気を付けてやれよ。」

4・なりたい（前書き）

じわじわと彼女が動き出します。

4・なりたい

「はーあ。」

盛大なため息をついて青子は頼杖をついた。

「どしたの？青子ちゃん」

ノートを書きながら心配そうに顔をして覗きこんだ。

「和葉ちゃんと服部くんは一緒に住んでるし、蘭ちゃんは工藤くんと仲良く過ごしてるし…羨ましい」

「黒羽くんと何かあったの？」

「まあ青子が忙しくてなかなか会えてないのもあるけど…ちょっと工藤くんにヤキモチ」

ふて腐れて言う青子に蘭は笑う。

「たしかに新一があんなにお友達と時間共有してるのは黒羽くんに出会うまでなかったかも」

その笑顔を見ながら先日の快斗との会話を青子は思い出していた。

梅雨真っ只中のカフェでの出来事だ。

「え？」

「だからモテる男を彼氏にもつと大変だなんて…」

甘い甘いココアを飲みながら快斗は盛大にため息をつく。

「快斗、ナルシストになっちゃったの？それともモテ期？」

「ちげーよ。それに残念ながら似たような顔立ちなのに俺はまったく大学で言い寄るやつはいない」

少しホツとしたのを自覚しながら仲良しの友だちのことを気にかける。

「…言い寄られてるの？」

「ただのゼミの仲間なんだけど熱い視線を送ってるな。蘭ちゃんは大学に遊びに来たりしないから存在もしらないだろうし。」

「ズバツと工藤くん拒否しちゃえばいいのに」

それが出来れば苦勞はねーんだが…なんて顔をして腕を組む快斗を見つめた。

「蘭ちゃんのこととは心配だけど…久々に青子に会っても話題は工藤くん。快斗って青子より工藤くんが好きだよなー」

目の前のティーフロートを飲み干してフンツとそっぽを向いた。

「冷たいこと言うなよ！！あの2人不器用で心配になるんだよ。どつかの誰かさんたちみたいで。」

「どつかの誰かさん？」

「そ。ここで向き合ってお茶している2人みたいな」

そう言われては聞くしかない。

「…どんな感じなの…？」

快斗から聞いた”ゼミ仲間の熱い視線を送る女”と接触したことを蘭から聞かされ青子の心臓ははね上がった。

「どんな子なの？」

心配そうに聞くが心臓はバクバク。

一つ気にかかることがあったのだ。

「可愛い子。2人ともあたしとは違うタイプだったわ。なんか…うまく言えないけど」

「2人とも暗い顔してどないしたん？」

ひよいと和葉が顔を出した。

「和葉ちゃん」

「お昼しよー」

お弁当をつつきながら話の続き。

「でもその子たちゼミの集まりだっただけやろ？工藤くんは蘭ちゃん以外は目に入らなくて！！」

「……うん」

「蘭ちゃん、なにかひっかかりがあるの？」

「……その子たちとは関係ないんだけど……朝、家を出たときから電車を降りる時まで視線を感じたんだよね」

「視線？」

「うん……気のせいかと思ったんだけど、新一もちよっと気にしてたみたいだし……」

それを聞いた青子は少し考え込んだ。

東都大学

机の上で携帯が震える。

「工藤くん。なってるよー」

携帯やらノートを出しっぱなしにしたまま机に突っ伏して寝ていた新一の横で沙耶は携帯を手に取った。

「あ…」

ふと見ると

”蘭”の文字と電話番号の表示。

ざっと目を通し新一を揺らす。

「工藤くん！！工藤くん！！」

「ん…なに？」

寝起きの表情にドキッとするのを隠しながら沙耶は新一に携帯を渡す。

「電話、なってたよ」

履歴を確認して少し表情を和らげた新一を見ながら自分の携帯に先ほど暗記した番号を打ち込んだ。

「沙耶！！後ろから見て誰かと思ったよ。めずらしいね、髪を下ろ

してるなんて」

美緒が肩を叩いた。

「あ…気分転換…かな」

「似合ってるけどね」

そう言って美緒は買ってきたパンを隣に座ってかぶりつく。

「工藤ー！！昨日は悪かったな、突然！！」

「…ほんとだよ。今度からは連絡入れるよ。」

賑やかに田中たちが近づいてきたが新一は無愛想に答えた。

「しかし…蘭ちゃんだっけ？すげえ可愛いな」

「…気安く呼ぶなよ」

ますます無愛想になる新一にお構い無く田中たちは話しかけた。

「なにになに！？工藤って彼女いんの？」

「しかも可愛いって！！写真とか見せるよ！！」

かつて世間に騒がれた”高校生探偵”、現在はメディアの露出は抑えているが探偵として名の売れている新一に”特定の彼女”がいることに皆興味津々だった。

一部を除いて。

「…残念だったね 沙耶」

「なにが？」

「工藤くん 彼女いたなんて…」

食べていたパンを置いて美緒は新一に目を向けながら沙耶に言葉をかけた。

「沙耶 高校生のときから探偵の彼のファンだったしね。」

「…当時は新聞とかでしか顔知らなかったけどね。大学で見えます好きになっちゃったもん」

うつとりと沙耶も新一を見る。

「蘭ちゃん…羨ましいな」

「え……………?」

思わず美緒は沙耶を見た。

「あたし 蘭ちゃんになりたい」

その目は真剣だった。

「沙耶…？」

「あたし今まで手に入れられなかったもの、ないもん、
真剣な目に

美緒はなにも言えなかった。

5・接触

「黒髪でー、細くて色白でー…ああ言うのが好みなんだな、土藤は」
しみじみと田中が言う。

「うわあ、会ってみてえ」

周りの男子が盛り上がった。

「うっせー。言ってる」

新一は周りをジロリと見て席を立ち、携帯で電話をかけ始めた。

おそらく、愛しの彼女に…

あんなに優しい顔をしてかけるのか…と沙耶はじつと目で追った。

「あ…蘭？どうした？」

『あ…ごめんなさい。突然なんだけど…』

「…え？まじ？」

微かに嬉しそうな顔をしたのを沙耶は見逃さなかった。

やだ…自分でも今、自分が嫌なやつだっただけでわかる…

そう沙耶は思いながらも

自分の茶色い髪をつまんで見つめた。

「くっどー！！何しとんや？飯にしようや」

「なあにニヤけた顔してんだよ」

賑やかに快斗と平次がやって来た。

「……………オメーら聞いたか？」

「「ああ？」」

「買い物終わったら蘭たち3人でここに寄るって」

「何でや」

「また急な話だな」

3人は急にソワソワし始めた。

彼女たちが大学に現れたことは今までにないのだ。

まあもちろん
彼らの

”独占欲”で学校の 自分たちの周りの男子に彼女を見せたくない気持ちももちろんあったることだが…

「工藤くん びっくりしてた？」

「うん、でも行っていいみたい」

電話をきって蘭が微笑む。

「久々に6人でお茶できるね！！楽しみ〜」

「ゼミのその子見れるんかなあ。ちょい気になるなあ」

和葉は純粹にそう言ったがただ1人、青子はまた難しい顔で卵焼きをつついていた。

それはまた、同時刻に快斗も沙耶を見つめて同じ行動をしていた。

「国本さんってどこの高校出身だった？」

「西高だけど…どうして？」
あまり沙耶に話しかけることのない快斗が声をかけたので周りはいんな驚いていた。

「西高かー…」

「どうした？黒羽…なんや難しい顔で」

ヒソヒソと隣で平次が聞く。

「いや、ちよつとな」

「だいぶ予定時刻過ぎたけど…いる？」

「いや…おらんね」

買い物を終えた女性陣はたくさんのショッピング袋を下げて東都大内をウロウロしていた。

「よく研究室にいるとか言ってたけど…電話してみようかな」

蘭が歩きながら携帯を取り出した。

「あ…蘭ちゃん前…!!」

ドンッ

青子の声も遅く思いつきり人にぶつかった。

「う…ごめんなさい…!!…あ
「あ…こんにちは」

ぶつかった相手は沙耶だった。

「買い物帰りに寄ったんですか？」

ぶつかった拍子にぶちまけた真新しい洋服たちを広いながら沙耶は微妙な笑みを向けた。

「蘭ちゃん大丈夫？」

「洋服、ビニールかかっててよかったなあ」

全てを拾い終えて沙耶が手渡した。

「工藤くん、学生ラウンジにいましたよ。それじゃ」

立ち去る沙耶に慌てて頭を下げた。

「ありがとうございました」

「知り合いなん？」

「あ、今のがその…ゼミの」

「蘭…!!」

上から声がして3人は見上げた。

すると2階の窓から快斗、新一、平次が顔を出していた。

「工藤くん。青子たちもいるんだけどなー」

「あ、わりい」

少しいたずらな顔をして新一は笑う。

「今そつちいくから待ってて」

快斗の声かけで男性3人は窓を閉めて支度を始めた。

大学で6人で集まるなんてはじめてだ。

校外で待ち合わせをすることがあっても学内に入ることなんてないのだ。

「…なんか、よう見ると荷物多いな」

和葉たちを見て平次は心底驚いた。という顔をした。

「ええやん。これを最後に夏のセールまでは買物我慢するんやから」

そんなやり取りを見ながら新一は然り気無く蘭の荷物を奪い取るように持つ。

「あ…ありがとう」

「工藤くん紳士々　　やっぱりこういうところで差が出るんだよ、快斗と工藤くん」

「え？じゃあなにか？俺が新一に劣ると。」

「勝ってると思ってたの？」

後ろのそんなやり取りはお構い無く。

新一は蘭の荷物に目をやり疑問をぶつけた。

「なんか砂ぼこりやら葉っぱが袋に入ってるのはなんでだ？」

「あ…さっき人とぶつかって荷物ぶちまけちゃったんだ」

「なあにやってんだよ。気を付けるよ」

袋についた砂を手で払いそんな注意をとばす。

「ぶつかった人、新一の家に来た女の人だったよ」

蘭の純粹な笑顔に新一は真剣な顔で見つめ返す。

「長い茶色い髪の人？背の低めの…」

新一の言葉に”そうそう”なんて軽い感じに返答をした。

「ふーん、そっか」

なにごともしなかったように

新一は左手でくしゃっと蘭頭を撫でた。

「うれしいなあ　6人でお茶なんて久々だし、いわゆるトリプルデートだよね!!」

青子は注文したパフェを頬張りながら嬉しさを全身で表現した。

「またしばらく集まれそうにないもんなあ。青子ちゃんと蘭ちゃん、忙しくなるやろ?」

聞き捨てならなかった。

”忙しくなる?”

もうすぐテストがやってきて、その後は楽しい夏休みのはずなのに。

「そうなんだよねー…テスト前にテスト対策合宿とか言って学校泊まり込みの二泊三日…」

蘭はカフェオレを啜りながらさらりと言う。

「まじ?聞いてねえけど…」

「だって今日発表されたんだもん。あたしも青子ちゃんもびっくりたよ…まさか学校に泊まり込みなんて」

「全然外出らんねえの?」

「コンビニに行くくらいはできるけど基本的には外出だめみたい…」

「ふーん…」

拗ねたように珈琲を流し込む。

「あーあ。工藤めっちゃ拗ねとる」

「本当に蘭ちゃんいないとダメだよなあ」

「うっせーよ…っつーか強制なのか？それ」

「うん…だって単位に関係あるんだもん」

「残念やなあ 工藤も黒羽も。黒羽はまあ実家やから平気やろ。工藤は飯どないするん？」

「オレだって作れねえことねーよ。いざとなったら」…」

「コンビ二弁当はだめよ！！」

「すかさず蘭の注意がとび

一同は笑いにつつまれた。

「なあ ところぞき。女性陣の学校に西高出身の子っている？」

「西高かあ…」

「周りにはおらんなあ」

「もしいたら教えてくれる？」

口元に笑みを浮かべながら快斗は甘い珈琲を飲んだ。

6・動き出す

みんなと別れたあとに新一に手を引かれいつもの道歩く。
工藤邸の近くに来たとき

「少し寄ってけよ」

と反則的な笑顔を彼女に向けた。

ほぼ強制的にともとれるその誘いに”もー”なんて答えながら嬉しそうに鍵が空くのを隣で蘭は待っていた。

ふと蘭がポストを見るとなにかが入っている。

「？」

分厚い封筒が投函されていた。
宛名も差出人もない。

「新一、これ…」

「んー？」

封がされていないなかったため蘭が新一に差し出したとき中身が滑り落ちた。

謝罪の言葉を述べながら慌ててかき集めていた蘭の手が止まる。

「……これ……」

「すげえな」

高校生探偵として新聞に載ったときの写真のコピーや最近の新一の日常をおさめた写真が大量に入っていた。

「……いつ撮られたの？」

「さあ？」

「さあつて……探偵でしょ？尾行されたり写真撮られたり気づづかなかつたの？」

半ば呆れながらも新一に危険が迫っているのではないかと蘭は心配そうに新一をみる。

「とりあえず珈琲が飲みたいなあ」

わざと蘭に甘えキッチンへ促す。

珈琲を淹れている姿を確認し、一人で封筒の中の写真を一枚残らずチエツク。

殆どが隠し撮りの写真で新一が中心となったものであったがただ一枚、他と違った写真があった。

おそらく朝の視線の正体はこれの送り主。

朝、新一と蘭が家から出る瞬間を撮ったものが入っていた。
蘭の顔をマジックで黒く塗りつぶしたものが。

自分の心臓の音が早いのを自覚しつつつ平静を装う。
蘭に無駄な心配をかけなくはない。

「新一ー！！珈琲はいつたよー」

ひよいとリビングに顔を出した蘭を思わず新一は抱き締めた。

「なに？どうしたの？」

「…充電中。」

ぎゅつと腕に力を入れ心のなかで誓いをたてる。

蘭を守るのはオレだ…

「沙耶、なに考えてんの？」

美緒は沙耶の買い物に付き合いながら親友の頭のなかを覗こうとしていた。

「なにって？」

「一応聞くけど…朝、どうしてあんなに早かったの？どこ寄ってたの？」

目当ての服を探しながら美緒ににっこりと笑顔を向ける。

「ね、覚えてる？高3のときの文化祭。」

「え？うん……」

「ミスコンであたしが1位で美緒が2位。」

「今思いっきり順位を強調した？」

むくれて美緒が沙耶を睨んだ。

「あたし、容姿には自信があるの。東都大学に入れるくらいの頭もあるし」

目当てのものを見つけたらしく鏡の前で自分にあててチエツク。

「蘭さんに負けてないと思うんだよね、工藤くん…新一…くんへの想いの強さも」

「あのね、沙耶。たとえそうでも、工藤くんは蘭さんが好きなの。好みの問題だってあるだろうし、何かガチッと工藤くんに合うんじゃない？」

一生懸命に美緒が沙耶に訴えるがとまらない。

「わかってる。だから、あたしが彼の好みに合わせる。」

手にとったワンピースをお会計し、満足げに袋を抱き締める。

「…呆れた」

美緒はため息をついてウキウキしている沙耶を眺めた。

…

「で？」

「でって…俺に何を求めてるんだよ、名探偵さん」

翌朝、ラウンジで缶珈琲を飲みながら快斗と新一はヒソヒソと話し合っていた。

「国本に出身校を聞いて、なにかを調べようとしてんのはわかってんだよ。で？成果は？」

「あのなあー…昨日の今日で何か分かると思うか？」

「捜査は足で！！オメー変装でも何でもして早急に調べろよ」

新一は珈琲の残りを飲み干しちらりと周囲を確認した。

「イラついてんな。なんかあったのか？」

神妙な顔つきで快斗は尋ねた。

「周りに人がいないのを確認し、昨日投函されていた封筒を快斗に差し出す。」

「うわ…悪趣味だなあ〜」

パラパラと写真を眺め顔をしかめた。

「なにを感じる?」

「そりゃあ”いつでもあなたを見ています”かな」

腕を組み体を仰け反らして新一はうなづく。

「なんもしてこねーなら放っておくだけだよ。蘭が心配だ」

「同感。」

「犯人は絞れてるんだが…下手に動いて刺激すんのがなあ」

そうなんだよなあと快斗はうなづく。

犯人 … 国本沙耶が熱い視線を送っていたことは快斗も平次も、もちろん新一も気づいていた。

ただ、下手に拒否をして逆上されたら…と考えると何もできず蘭の存在を気づかせるようなことはしていなかった。

が、いつまでもそれでは

期待をさせても…と少しずつ”彼女がいます”ということを醸し出す予定であった。

しかし

予定よりも早く蘭と彼女は接触してしまったのだ。

「工藤!!!黒羽!!!」

「おー平次。そんな慌ててどうした？」

「彼女、まじやぞ……」

3人で頭を並べて窓から下を見る。

「……髪まで染めたのね」

おちゃらけて快斗は言つが目は笑っていなかった。

7・親友の証言

蘭に似ている。

3人が受けたのはその印象だった。

もちろん違いははっきりしていて別人なのは歴然。

しかし上から見下ろしたとき

長い黒髪が揺れ、着ているワンピースは蘭が新一に”似合うかなあ？”と見せてきた昨日買ったものと同じだった。

凛と背筋を伸ばし歩く姿は意識して似せてきたことを匂わせた。

「危険な香りがすんなあ、工藤……」

同情ともとれるその発言に新一はため息をついた。

「どんなに蘭に似せてこようが、蘭以外に惹かれねーよ……」

「んなこたあ俺らはわかってるよ。わかってないのは彼女だろ？」

蘭以外の女に興味はない。

新一は自分でも酷いと思うが

もし、方が一、蘭に危害を加えるような人がいたらその人物に恐ろしく冷たく接することすらできる。

蘭が”あの子に優しくしないで”と言えばその通りにできる。だが、優しい彼女はそれを望まない。

”新一は優しいよ”

それが暗示のように胸に響き、彼女の目にそううつるのならばそのような男になろうと思うのだ。

それほど、新一にとって彼女は大きな存在であり、彼の世界は彼女中心に回っていた。

「こんな男のどこがいいかねー。明らかに蘭ちゃんオタクの推理バカだけだ」

快斗がしみじみと言いながら新一の頬をつつく。

「少なくとも黒羽よりはいい男ですから」

笑みを浮かべながら快斗の手を払う

「それも、幼なじみの姉ちゃんの気を引くための努力の結晶やもんなあ」

「…うるせーよ」

少し顔を赤らめて口元を手で隠し肘をついた。

下では新一の姿に気づいた沙耶がにこやかに手を振っていた。

「つつーかさ、西高に探りに行くのはいいよ？でもさー、手っ取り早く彼女の友人に話聞いた方が早くない？ほら、いつも一緒にいるさ…」

「せやかて、そんな親友のことべらべら話すか？」

「話すわよ?」

快斗と平次が緩く会話をしていたときに美緒が横から入ってきた。

「木梨さん…」

「沙耶は昔から成績もよくて可愛くて。イイコだけどプライド高いからね…」

真面目さが変な方向向いちゃってるのよ」

そう言うと快斗の隣から窓を覗き沙耶を目で追う。

「あれも、工藤くん好みになろうとしているのよ。あの子、高校生のときから工藤新一のファンだったから入学式で見かけてマジになったのよ」

「でも愛情表現間違ってるねえ?」

快斗はさきほど新一から受け取った封筒を美緒に渡した。

中身を見た美緒も顔をしかめ新一に向き直した。

「最初はね、工藤くんに彼女がいるなんて知らなかったから応援しちゃってたのよねー。もし沙耶と工藤が付き合えばあたしも名探偵とお近づきなんて思ってた。」

でも蘭さんがいるって知って…諦めるかと思ったら変に對抗意識もやしちゃったみたいで。

一応説得したわよ?でも聞かなくて」

深い深いため息をついて顔を手で覆う。

親友をどうしたらとめられるのか、美緒も一生懸命に考えていた。

「国本さんが蘭になんかする可能性は？」

新一が口を開く。

「直接的にはないと思うけど…：…どうかなあ。あの情熱がどこにどう向くかによるけど…」

4人は腕を組んで考え込む。

「あたしも気を付けとくから。なんとか沙耶を止められるように」

「なあ。あんた親友やる？なんで俺らにそんな情報くれるん？別に親友やったら”彼女いても頑張れ”言うても可笑しくないやんけ」

平次は疑問を素直に投げ掛けた。

「沙耶に間違ったこととして欲しくないだけよ。それと…」

沙耶がこちらに向かってくるのに気づいて美緒は小声にして続けた。

「中学のときに沙耶に彼氏とられたの。だから今さただけど少ーし沙耶に仕返しも入ってるかな？」

8・お弁当

「美緒、さつき新一くんとなに話してたの？」

「工藤くんにとって言うか工藤くん”たち”と話してたの。羨ましい？」

「羨ましいよーあたし全然話す機会ないし」

「神様が諦めろって言うてるのね」

美緒は肘で沙耶をつつきながら続けた。

「新しい出会いなんてどう？杯戸大と合コンセッティングするけど」

「美緒…この間までは頑張れって言ったのにすごい変わりようね」

沙耶はふてくされて言う。

「そりゃそうよ。彼女いる人を好きになるなんて。奪い取ってまで手にいれたいの？」

「……美緒もしかして、まだ怒ってるの？」

不安気に美緒の顔を覗きこむ。

「怒ってないよ。あれは彼のほうが沙耶を好きになったんだし。ま、当の沙耶は付き合った途端に冷めて別れを切り出してたけどね」
「顔色を変えずに淡々と話す美緒に沙耶はうつむく。」

「沙耶のことは大好きよ。でもね、同じことを繰り返さないでほしいから止めるの。」

それに工藤くんを敵にまわしたくないしね」

「…ありがとう。でも本気なんだもん。」

自分でも驚くくらい彼が好き。それに…」

「ん？なに？」

「自分でも止められないくらい蘭さんに嫉妬してる」

なぜ、自分が先に工藤新一に出会えなかったのだろうか。

出会えていたらなにか変わったかもしれないのに

沙耶は毎日そんなことを考えていた。

「あたしも帝丹高校受ければ良かったかなあ」

「まあね…かつて高校生探偵として活躍してた彼の私生活なんて。

あたしたちに何にも知らないもんね」

「…蘭さんは知ってるのよね」

長い睫毛を伏せて消えそうな声で呟く。

「羨ましい…」

講義も聞かずに2人はずっとそんな話をしていた。

あと20分で終わる、というとき

後方から携帯電話の音がした。

「はい…工藤です」

キリッとした声に胸を高鳴らせながら教室を出ていく姿を沙耶は目で追った。

「事件かな？」

「事件だろうね」

案の定、午後のゼミには新一が戻ってくることはなかった。

「工藤くんがいないと進まないねー」
頬杖について美緒がため息をつく。

「デジャヴかなあ…前にもこんな話をした気がする」

「今日も工藤の家に行ってみるか？」

田中が提案する。

「でもまた怒られるぞ〜。軽減させるために一応連絡入れとくか。」
木下が新一にメールを入れる。

その頃、警視庁…

「げ…」

木下からのメールを見て思わず本音が出た。

そして時計を確認した。

「ん？どないした？」

やはり事件と聞けばじっとしてられない平次も警視庁へと足を運んでいた。

「ゼミのやつらがまた家に来るって連絡入ってた」

「ほなああの姉ちゃん2人も？」

「ああ…今日は蘭が来るって言ってたし。急いで帰らねーと」

「工藤、俺も行くわ」

「あ？何だよ」「」

「ついでに和葉も」

何が楽しいのか平次は満面の笑みで新一の荷物を持ち警部たちに挨拶をして早々に警視庁を出ていく。

「ただいまー」

家に灯りが点いていることから蘭が来ていたことを確信した新一は

大声で声をかけた。

「靴が沢山…人がいない間に何人上がりこんでんだよ…」

「まあこんだけ広いからなあ。居場所には困らんなあ」

立ち止まる新一を追い越し平次は上がり込む。

「おかえりなさい、服部くん、新一！！」

笑顔で迎える蘭の手にはレモンパイ。

新一の帰りを待ちながら焼いていたのだろう。

「ゼミのみんなが待ってるよ」

「わりいな…いつも突然で」

「大丈夫！！ちょうどパイ焼けたから切って持ってくね。凄い綺麗に焼けたんだから」

笑顔でまたキッチンに消えていく蘭を見届けリビングへと向かう。

「……おかえり〜！！！！」

想像以上の笑顔で迎えられて思わず新一は脱力した。

「…オメーら、いい加減にしるよな。蘭にまで気を遣わせて」

人数分のミルクティは蘭が用意したものでろう。まだ温かそうだった。

「わりかったよ。俺らが到着したときにまだ工藤が帰ってなかったから困ってたら丁度彼女が来て開けてもらったんだよ」

「合鍵なんて渡してる仲間なんだな」

田中と木下が次々と言葉を投げ掛ける。

「いいからゼミ研進めるぞ」

「いやいや、ちょっと休憩　蘭ちゃんがレモンパイご馳走してくれるってからさ」

そう言うとき田中はいそいそとプリントを片付け始めた。

「オメーら…図々しいにも程があるぞ。服部以上に…」

呆れた様子の新一をよそに蘭がパイを持ってきた。

「新一に合わせたから少し甘味が足りないかもしれないけど…もしよければ」

皿を配る蘭の横から新一はつまみ食い。

「気に入らなきゃ食わなきゃいいんだよ。本来はオレのものなんだから」

そう言いながらパイを口に運び顔をほころばせた。

「ほんまに工藤…姉ちゃんの作ったもん美味そうに食うなあ」

「オレ好みに作られてるから全部口に合うんだよ」

隣で聞いた蘭も嬉しそうに幸せそうに笑いエプロンを外した。

「あれ：外ではストールだったし今までエプロンで気づかなかったけど、国本と蘭ちゃんワンプリース同じ？」

今まで触れなかったことに田中が触れた。

蘭は気づいていたのだろう。顔色を変えることなく微笑む。

「昨日ぶつかった時に見えちゃったんだ。すごく可愛かったからあたしも買った」

そう言って沙耶はにっこり笑う。

「お店の人気商品ってなってたから…」

なんて蘭は微笑むがやはり少し複雑そうではある。

その空気を壊すように和葉がやってきた。

「なんや、呼ばれて来たけどぎょーさん人おるやん」

「そお言うなや。姉ちゃんのレモンパイ食べるで」

「あたしが言ってるのは蘭ちゃんに迷惑がかかるやろってことや！」

テンポのいい会話に呆気にとられた一同は2人を見つめながらレモンパイを口に運ぶ。

その横で蘭はバタバタと荷造りをしていた。

「あ…蘭ちゃん明日からやつけ？」

「うん…今頃青子ちゃんも荷造り中じゃないかな？」

「蘭さん、旅行でも行くの？」

会話を聞いていた美緒が声をかけた。

沙耶も美緒の隣で興味深そうに聞いている。

「あ、合宿みたいなのがあつて学校泊まり込みなの。トラベル用のものつて全部ここにあるから荷造りしてるの」

「じゃあ数日工藤は俺らと昼は学食だな。どーせ自分じゃ作らねえだろ」

それを聞いた沙耶はいち早く反応をした。

「お弁当！！あたし作る！！」

ガタンと立ち上がり沙耶は大声で言った。

その剣幕に一瞬静まり返ってしまった。

「あ…だから、これからもお昼に集まったりするじゃない？だからみんなで食べれるように作ってくるよ、美緒とあたしで。」

慌てて取り繕う沙耶の横で美緒は驚いていた。

「あたしを巻き込まないでよ！！なんであたしが…」

「いいじゃん！！おかずはあたしが作るからお握りだけ作ってきて

よ。ね
」

美緒と沙耶がそんなやりとりしているのを見ながら新一はため息を
ついて会話を止めた。

「いや。別にそこまでしなくて。学校行く途中にパンとか買っし。
とりあえずレポート進めようぜ」

その言葉を合図に蘭と和葉は食器を片付け始め

田中たちはプリントを出した。

沙耶は平静を装うが唇を噛みしめ涙を堪えていた。

食器を片付けながら蘭はその姿を見て見ぬふりをしていた。

9・余裕がない

「じゃー！また明日な」

「おう。」

玄関で別れの挨拶をしながら靴をはく4人を新一、平次、蘭、和葉は見送っていた。

「あ、あの。お弁当……すこし余分に作るから……パンが買えなかったりしたら遠慮なく言ってね」「」
遠慮がちに言うが沙耶の目は真剣だった。

「……………ああ」

壁に寄りかかったままそう一言だけ返事をする。

「じゃあまた明日ね、服部くん、新一くん」

パタン

「はーあ。なんや疲れたなあ」

平次はわざとらしく伸びをして和葉と共にリビングへ向かう。

「蘭？どうした？」

「……………新一くん、だって」

「ああ？」

思いつきり間抜けな声が出た。
そんな新一とは対照的に蘭は静かな声だった。

「なんか…本当に大学はあたしの知らない新一の世界があるのね」

「なに言ってるんだよ、オメー…」

「いいの！！新一は何も悪くないし、あたしが勝手にモヤモヤしてるだけで…」

そういうと新一の顔も見ずにすり抜けキッチンへと足を運ぶ。

もちろんその後ろを新一は追いかけるがこちらを見ようとしないうちに頭をかかえた。

「残り野菜でお鍋するから服部くんと和葉ちゃん一緒に食べようよ。どうせ数日、新一は自分で作るなんてしないでしょ」

「…おい。なんか最後んとこ微妙に嫌味っぽく言わなかったか？」

「べつに？よかったわね、あたしがいなくてもご飯作ってくれる人はいそうだし？」

野菜を切りながらもやはり新一を見ようとしないう。

和葉は心配そうに眺めるが自分の幕ではないと口をつむぐ。

「弁当のことか？断ったじゃねーか。勝手にあつちが言ってるだけでオレは別に」

「わかってる！！だからモヤモヤもイライラもあたしの勝手なの。」

はい、食器運んで!!」

一方的に会話をきられ新一は不満そうだったがこれ以上話しても堂々巡りだと諦めた。

「名探偵も蘭ちゃんのことには弱いんやな」

「姉ちゃんはまだ言葉に出さんからなあ。証言少ないからまた余計に難事件や。しかも工藤は姉ちゃんのことやと急に脳細胞の働き鈍くなるからなあ」

リビングからこっそりと2人を見つめていた関西カップルは眉間に皺を寄せうぐんぐんと唸っていた。

一緒にいる時間が限られている。明日からだって2日間会えない。自分が一緒にいられない時間を共有し、自分の知らない彼を知っている。

それがすごく羨ましい。

この感情は

”嫉妬”

なのだろうか。

せめて一緒にいられる時間は可愛くいたい。

そう思っただけで気分転換に友人らと買い物をして新調したワンピース。見せたら彼も褒めてくれた。

それを

彼女は手に入れていた。

彼女の隣では霞んでしまいそうのでエプロンをつけキッチンに立っていた。

モヤモヤする。

彼の友人だから

こんな感情は抱きたくないけど…

悶々と考え事をしながら野菜を切る。
気づけば鍋に入れる具としてはかなり小さめになってしまった。

「ええやん。食いやすくなって」

と 平次はフォローを入れる。

「ごめんね ぼーっとしちゃって」

かちゃかちゃと食器の音が響くなか

”なんか気まずい…”と隣の恋人の様子を伺う新一と蘭。
こんな空気のまま泊離れるのはいいのか悪いのか…
ぐるぐる考えながら食事をすすめた。

「ひいたら負けやで！！あの女が工藤くんに気があんのはバレバレやん。たぶん気づかれるようになってんけど」

片付けを手伝いながら興奮した和葉が言う。

「うん…まあそうだよね。」

浮かない顔で相づちをうつ。

p i p i p i p i

「蘭ちゃん、携帯鳴ってんで」

「あれ？誰だろ。非通知だ…もしもし？」

『……………』

「もしもし」

『ガチャ』

「どないしたん？」

「きれちゃった」

携帯を片手に呆然と立ちすくむ。

「間違いやったんかな？気にせんでええんちゃうっ。」

「うん、そだね」

「わ・ざ・と・や…絶対」

「そんな強調しなくたってわーってるよ」

珍しく2人でゲームをやりながら会話をする。

「今まで苗字呼びやったんになんで姉ちゃんの前でわざわざ」新一くん”なんや”

”新一くん”のどこを高い声で言いしながらも顔はマジだ。

「何がって…蘭が要らぬ想像を働かせてるのがなあ…参った」

「それほど姉ちゃんも不安募らせてんとちゃっつ？」

先日の快斗の会話を思い出す。

不安、寂しさ、そこにきて

ゼミの女が登場…

「オメーさあ、人のことだと気がつくのに自分のことだと鈍いのは何でだ？」

「そりゃお互い様や」

「平次ーそろそろ帰ろー」

和葉に呼ばれて立ち上がる。

「まあおそらく黒羽のやつが色々情報かき集めてるやろ。なんやかんなや黒羽も姉ちゃんに負けんくらい工藤大好きやし」

帽子をかぶり笑顔を向ける。

「はは…人気もんだな…」

「新一、あたしもそろそろ…」

ひょいと蘭は顔を出した。

「え？泊まってかねーの？」

「明日から合宿なのに今夜は泊まってけないよ。お父さんに顔みせないと」

それを聞いて思いつきり

”つまんねーの”という顔をして蘭が持っていた旅行カバンを奪い取る。

「んじゃ送ってく。明日も朝博士に車借りて学校まで送るよ」

「え？いいよ朝早いし…」

「こんな荷物持って満員電車もねーだろ」

「じゃあお願いしようかな」

やっと笑顔になった蘭をみて満足そうに新一も笑う。

「じゃあ蘭ちゃん、勉強合宿頑張ってな」

「工藤のことは任しとき！…」

「ありがとうございます、おやすみなさい」

大阪カップルと別れ歩き慣れた道を2人で歩く。

なかなか会話が見つからない。

喧嘩をしたわけじゃないのに会話がないなんて今までであったろうか…

うつむいて歩く蘭がふと顔をあげると新一が数メートル先で立ち止まって振り返っていた。

「あ、ごめん!!」

慌てて蘭は駆け寄った。

「なあにタラタラ歩いてんだよ。ほら」

右手を差し出され自分の左手を重ねる。

「2泊かあ」

「え？」

先ほどとは違った明るい声に思わず新一を見る。

「修学旅行や移動教室での2泊は蘭と一緒にだったから早く感じてたけど離れてると長そうだな」

繋いだ手をぎゅっと握りしめて新一は優しい声でゆっくり話す。

「待つてらんないの？」

「待つてられなくて学校の近くまで行くかも」

「あたし勉強してるから会えないかもよ？」

「会えなくても行くかも」

「新一は勝手だよ」

「はあ？」

”勝手だよ”と言うわりには蘭の声は楽しそうだった。

「誰かさんが”やっかいな事件”で戻ってこれなかった1年弱、あたしは待つてたのに新一は2泊も待てないんだ」

面白いものを見るように蘭は新一の顔を覗きこみ笑う。

「しゃーねーだろ。”幼なじみ”から”恋人”になってからより欲張りになつてんだからよ」

「欲張り？新一が？」

「そ。今までは登下校が一緒なだけでよかったけど、今は飯も一緒に食いたいし、おっちゃんが許すなら泊まって行って欲しいし、本当なら片時も離れたくないから蘭を大学に連れていきたい。」

「…東都大の授業なんか受けらんないよ」

「じゃあポケットに入れて連れてく」

「やーよ。新一ポケットに何でも入れるから。ゴチャゴチャしてそ
う」

話が脱線した。

「とにかく」

コホンと咳払い一つ。

「そーゆーこと、オレも余裕ねーな…」

「ふふ」

嬉しそうに新一の腕に自分の腕を絡めて柔らかく笑みを浮かべた。

「よかった…あたしだけじゃなかったんだね」

「ったりめーだろ。」

コツンと額を合わせて言う。

「…あんま余裕のない姿なんか見せたくねーけど。かっこわりいか
ら」

9・余裕がない(後書き)

ポケットに蘭ちゃんを入れて…って”南くんの恋人”みたい(笑)

個人的には蘭ちゃんのことになると余裕のないわたししてる新
一くんは大好きです

「つたく　この調子じゃあ同棲云々どころじゃねーな…」

蘭を無事に送りどけたものの先ほどの額を突き合わせている現場を事務所の窓から見ていた小五郎にあやうく一本背負いをきめられそうになった。

もちろん蘭が止めてくれたが別れの挨拶もままならず帰宅することになってしまったのだ。

「はーあ…」

明日から2日だが蘭がいない。

たった2日なのにひどく憂鬱だ。

しかし…この2日、蘭は学校からほとんど出ない。この間になにかされる心配はない。

「なんとかしなきゃだな、彼女」

熱いシャワーを浴び眠りについた。

「なんでこうなる？」

朝、探偵事務所に蘭を迎えに行った新一。
なぜか逆送し江古田駅前に快斗と青子も迎えに行くことになってしまったのだ。

「工藤くん、ごめんね」

「中森さんは荷物あるし別に構わないよ。ただ…」

ちろりと快斗を見る。

「はいはい。安全運転を希望します」

軽いノリで快斗が言う。

「まあいいじゃん。2人送ったらどっかで飯食おうよ。どーせ朝飯まだだろ？」

まあいいか、と軽く息を吐き車を発進させる。

「ありがとう、新一。助かった」

「どうもありがとう」

よく似た2人はふわりと笑顔でお礼を言う。

「頑張れよ」

「青子、勉強しすぎてパンクすんなよ」

ヒラヒラと手を振り別れる。

青子と蘭は車が見えなくなるまで見送りをした。

「さて…と。わざわざ朝早くから電話して送らせた理由は中森さんのためだけじゃねーだろ？」

「まあな。昨日、青子と西高に行ってきたんだ。」

「ああ。で？」

「当たり前ながら後輩たちからはロクな証言が得られなかった」

「まあそうだろうな」

手近なカフェに駐車しエンジンをきる。

快斗は降りてテイクアウトでサンドイッチにベーグル、珈琲2つを買った。

「ほら。珈琲。おごってやる」

「さんきゅ」

「で、さっきの続き。放課後に合わせて行ってよかったぜ。テニス部に卒業生が指導しに来てたんだ。なんと彼女らの元クラスメート」
「その顔はなんか得られたって感じたな」

2人が珈琲に口をつけたとき
窓ガラスが叩かれた。

顔を向けるとそこには美緒と沙耶が立っていた。

「こんなとこでなにやってんのー?」

後部座席を開けて2人は車に乗り込む。

「朝飯ー2人は?」

「お弁当完成させて沙耶を迎えに来たんの。んで学校向かってたら
工藤くんたちを見つけたの」

美緒が答える。

「こんなとこで油売ってたら学校に遅れるんじゃない?」

「大丈夫。まだ早いから。もしかして蘭さんを送っていったとこ?」

「よく分かったな。そーゆーこと。」

4人は少し話したあと

沙耶と美緒は学校へ、新一と快斗は車を博士に返した後少し家に寄
る。

そしてふとポストに目をやると

「…まただ」

宛名のない封筒。中身は…

「げ…」

「なになにー？あ…」

隠したのも遅くバツチリ快斗は写真を目にしていた。

「敵もなかなかやるな。俺でもその姿を撮るのは難しい」

「誉めてる場合か！昨日も撮られてたか…」

昨夜、蘭たちと家を出る瞬間、そして2人で歩く姿、額を突き合わせた姿が数枚の写真におさめられていた。

「ちなみに今朝はポストに入ってたのか？」

「いや、新聞を取ったときにはなかったと思う。しかも昨夜の写真だから家でプリントアウトしたか、コンビニか…あ。」

誰かいる。

電柱の影から誰かがこちらを見ている気配を感じながら静かに背を向けて新一は快斗に目で合図する。

「まただ…」

携帯を見つめてため息。

「どうしたの？」

心配そうに顔を覗き込む青子に蘭は留守電を聞かせた。

電話を耳にあて1分。

なにも聞こえない。

無言電話だった。

「きもちわる〜…」また”ってことは最近あるってこと?」

「昨日新一の家で1回、帰宅してから1回、夜中に1回そして今って感じかな。」

「え〜…それって嫌がらせ?きもちわるい〜。工藤くんには相談した?」

「してない。心配かけてもアレだし。」

「う〜…そっかあ」

「いいの。無視してればいいだけだし」

「青子にできることあったら言ってね!!青子も蘭ちゃん守るから!」

「ありがとう」

穏やかに話すが一つ気がかりなことがあった。

新一と別れたあとの無言電話。

いや、正確には”無言”でなかった。

『キエデ…』

気のせいなのか、いや、でも消えそうなくらい小さな声でそう入っていた。

聞き間違えたかと思ひ何度か聞いたがそう聞こえた。

何度かきいてやはり怖くなり携帯の電源を切った。

翌朝電源をつけるとまた留守電。

それは無言だった。

一体誰が…？

「蘭ちゃん、青子ちゃん！！夜のコンビニ買い出しじゃんけん参加しない？」

「「するするー」「

合宿はめんどくさいし、新一と会えないのは寂しいがあんな電話があった後だけに大人数で過ごせるのは蘭にとってありがたかった。

「…おつかしいなあ。勝負事は強いはずなのに…」

「青子と蘭ちゃんは明日買い出しかあ…ま、気分転換になるよ！！」

新一の合図で快斗が動いた。

電柱の影の人物は逃げる様子もなくあっさりと捕まった。

「学校に行つたんじゃないか？」

人影の正体は美緒だった。

「あ、沙耶が昨日工藤くんの家に忘れ物したっていうから取りに来たの。あの子1限であたし2限からだから」

「忘れ物？」

なんかあつたか？と考えつつ鍵をあけ快斗と美緒を招き入れる。

「なんかさつき封筒を見て2人とも眉間に皺寄せてたけど…どしたの？」

「ああ…ちょっとな」

快斗が答える。

「…沙耶、迷惑かけてない？なんかちょっと最近らしくない感じがして心配なんだあ」

美緒がソファーに腰をかけてうつむく。

「2人は中学から一緒なんだよね？昔から仲良かった？」

新一がカバンの中身を入れ替えながら聞いた。

「そ。中学から。仲良くなったのは高校からだけど。黒羽さんと工藤くんは？」

「俺らは高校は別。たまたま知り合いだっただけで…」
言葉を濁す。まさか探偵と怪盗で知り合いましたなどとは言えない。

「工藤くん、彼女とはいつから知り合いなの？」

「いつからかな…気がついたら一緒だったんだよな。幼馴染みだからね」

「え？そうなの？」

「ところで国本さんの忘れ物あった？」

あまり深い話にはならないよう早々に話を切り上げた。

「なんかないみたいだね…もし沙耶の定期入れが見つかったら教えてくれる？学生証も入ってるみたいでさ」

「わかった。気を付けてみる。で。要件ってそれだけ？」

新一の静かな物言いに美緒がゆっくりと新一の方に目をむけた。

「わざわざココに来るなんてなんか言いたいことがあるのかと思っ
て。」

定期入れなんて口実でしょ。もし本当に定期入れなんてあつたら才
しも連絡いれるよ、なくちゃ困るものだしさ。」

ニツと口の端をあげて笑う。

美緒はセミロングの黒髪をかきあげて立ち上がった。

「さすがー…まあ工藤くんに嘘つくのが無理あるか。
覚悟のうえだったけどね」

「沙耶に、ハッキリ言ってあげてほしいんだよね。工藤くんたちだ
って沙耶がこのままにする気ないでしょ？」

「ずるずる引きずるよりスパッと諦めさせてほしいの。そうじゃなか
らば沙耶も可哀想だしゼミ研もやりにくいじゃない」

言葉は選んでいるようだがまっすぐに新一を見据える瞳は真剣で強
さを感じた

だまって快斗は様子を伺っていたが美緒の前に立ち言う。

「新一がなんで今まで国本さんに対して曖昧な態度だったかわかっ
てる？」

逆上されたりしたら困るわけ。

それにゼミ一緒だから気まずくもなりたくないじゃん？」

「そんなこと言っただってこのままの状態だつて良くないと思うよ？
少しでも沙耶のことと思うならさ、ね？」

もし沙耶がヒステリー起こしたりしそうになったら責任もって止め
るからさ」

「…わかった」と返事しとくよ。」

3人は言葉少なに学校へと向かう。

「美緒、ごめんね！！定期入れ、カバンの奥底にあったの！！」

顔の前で手を合わせて美緒に謝る。

「いいの、工藤くん家じゃないかってあたしが決めつけちゃったし。あつてよかつたじゃない。工藤くん、黒羽くんもごめんね」

沙耶と美緒は2人に手を振り教室へと向かった。

「なんつか胸騒ぎ。俺さ、推理は専門じゃねーけど、そーいう」勘
”はあんだよな”

快斗が頭をかきながらブツブツとこぼす。

「まあこの2日で終結させるつもりだけどな。オレは。ただ…彼女にはちょっと辛いかな。」

「新一なんか好きになるから…報われねえ恋だったな」

新一好みになるうっていう気持ちは痛いほどわかった。

今日の彼女の服装も彼女と蘭が初めて会った日、蘭が着ていたスカートを纏っていた。

昼、いつものようにゼミ研で集まることになった。

なぜか当然のように快斗は新一の隣に座る。

「あ。そうそう。宣言通りお弁当作ってきたんだ。つまみたい人はどうぞー
沙耶、出して出して」

明るい声で美緒が言う。

「はい。多めにあるから良かったら新一くんも…」

遠慮がちに沙耶が割りばしを配る。もちろん新一にも。

「あ、いいよ。オレ後で服部たちと空き時間外で食うし」

「でもお腹空かない？あたし卵焼きは自信あるんだ。ひとつ良かったら…」

「それ、甘い？」

「え…？ああ、あたし卵焼き甘い派だから」

新一は顔をあげて沙耶に静かに話す。

「オレ甘い卵焼きだめなんだ。」

その言葉に沙耶は驚いた表情をした。
そして記憶をたどる。

以前…入学して間もない頃。

快斗と話していた会話を聞いていた。

「…いつも食べてた卵焼きって甘いじゃなかった？」

新一は表情を変えることなく言う。

「たしかに蘭の卵焼きは甘いけど甘いだけじゃねえんだよな。砂糖
じゃなくてだしのきいた甘さだから」

「あたしも自信あるよ？感想聞かせてよ」

先ほどより強めに沙耶も言う。

「悪いけど。遠慮しとく。頼むから困らせないで」

なるべく優しく新一は言うが沙耶も引かない。

”食べて””遠慮する”の堂々巡りだった。

「じゃあ明日は新一くんの好きなもの入れてくる。何が好き？」

「いや、お構い無く。オレの好きなものは国本さんには作れないか

らな」

頭をかきながら、口調が強くなるように注意をしながら答える。

「言ってみて？」

「…オレの好きなものは、蘭の作ったもの。国本さんがどんなに料理がうまくても、オレの口に合うのは蘭の料理なんだよ」

だから悪いけど…と続けようとしたがそれは叶わなかった。

ドサッ

弁当箱が床に落ちて料理が散らばる。

「…そんなに彼女が好き？そんなに大切に？」

大きな瞳が揺れた。

こうなることは想定範囲内。

「とりあえず、落ち着いて…」

新一が沙耶をなだめようと右腕を伸ばしたがそれをすり抜けそのまま沙耶はラウンジを飛び出していった。

「沙耶！！」

もちろんその後ろを追うのは美緒だった。

新一と居合わせた田中、木下、快斗は落ちたおにぎりやおかずを広い集める。

周りの人々はその姿を見ていたがほとんどが好奇の目。手伝う者はいなかった。

「なんや凄いことなつとるなあ。なにがあつたん？」

授業を終えラウンジにやってきた平次が声をかけた。

「ちよつと…な。」

新一がぶっきらぼうに答える。

「工藤さあ、もつと言い方なかったのかよ…国本可哀想じゃんか。」

田中が落ちた唐揚げを広いながらため息混じりに言った。

「他に言葉があんなら教えてくれよ。あれでもオレの最大限の優しさだったんだらよー」

こんなギャラリーのいるところでこんなことにはなりたくなかった。自分が悪者になるならいい。

だがこんなに注目されて彼女は辛かったらう。

「今日はもう集まれねえだろ。また各自書類集めたりしてまとめよっぜ」

辺りを片付けてカバンを持ち新一、快斗、平次はラウンジを後にする。

「この後どうなるかだな…」

「ああ。後味わりーが…仕方ねーか」

「へこんどるな 土藤…」

なんか気が重い。

こんなときは蘭に会いたいが先程学校に送ってきたばかりだ。

「へこんでなんかいらんねーよ。彼女がどう出るか注意をはらわねーとな」

12・彼女の失恋（前書き）

沙耶ちゃん視点で語られます。

イイコなんですよ、本当は彼女。

12・彼女の失恋

叶わない。
敵わない。

こんなの初めて。

今まで何でも手にはいった。
もちろん、それ相当の努力もしてきた。

小学校のとき

マラソン大会で1位を取った。

毎日朝練習のために川沿いを走った結果。

中学のとき

テストで上位5位には必ずいた。

予習復習を怠らずやったから。

高校1年のとき

ミスコンにエントリーされたけど2位だった。

1位が欲しかったからそれ以来ダイエットにスキンケア。毎日笑顔を絶やさずにいた。

2年3年は連続優勝！！

だから

工藤くんには彼女がいても
努力次第で振り向いてくれると思った。

毎日見ていた工藤くんのお弁当。

綺麗な卵焼きが2切れ。

入学して間もない頃。

黒羽くんとお弁当を食べていた新一くん。

『卵焼きキレーだな…1個貰い!!』

『ふざけんな!!返せよ』

『もう食っちゃった。甘い卵焼きなんだ。うまー』

そんな会話を聞いた。

甘い卵焼きは焦げやすい。

いつかお弁当を作ってあげたくて毎日練習していたのはあたしだけの秘密。

蘭さんを見て

ああいう子が好みなんだと

髪を黒くしていつも束ねてセットしていたのを下ろした。

服装も変えようと同じものを身に付けたり…

それでも

敵わない。

「沙耶…大丈夫?」

美緒が肩をたたく。

「美緒…あたし…」

「いいんだよ、泣いちゃいなよ。」

そう言われて我慢していたものが出てくる。

「工藤くんは手にはいらぬよ。蘭さんのことどれだけ好きかわかっただでしょ？」

それにあの2人は幼なじみなんだってさ。付き合いの長さハンパないよ」

「え…幼なじみなの？」

もうずっと彼女は彼の隣で過ごしてきたの？

それだけじゃない…これからも彼の隣で彼を見ていくの？

胸が苦しい…

「諦めなよ。蘭さんがいるかぎりチャンスはないよ」
蘭さんがいるかぎり…

チャンスはない…

「…そう…だね…」

13・インターバル（前書き）

ちよいと今回はインターバル的な感じですよ

「？」

『…用事なくちゃダメなのかよ』

いつも自信満々な彼の気弱な発言に蘭は小さく笑う。

「今なにしてたの？」

『黒羽と服部とファミレス来てる。』

注文を終えてから席をたち蘭に電話をした。とそんなところだろう。

「明日ね。夕方くらいに青子ちゃんと買い出し当番なの。学校近くのコンビニとかにお菓子とか買いに行くよ。」

『じゃあ偶然を装って黒羽とつろつくか』

「ふふ。そうして。」

『じゃあな』

朝、わかれてから数時間なのにお互いが恋しい。恋しいが前のような不安は解消された気がする。

気持ちか…寂しいのはお互い様だから。

「幸せそうな顔してるー」

「青子ちゃん！！からかわないでよ！！」

真つ赤な顔で抗議した。

「よかった。最近蘭ちゃん…よく不安そうな顔してたから心配だったの。」

「青子ちゃん…」

「環境変わったばっかだから不安になっちゃうよね。青子もだし、和葉ちゃんもだよ。」

「ありがとう。もう大丈夫」

「でもやっぱり無言電話のこと工藤くんには言わないんだね」

突然青子は話を変えた。

蘭の表情も変わる。

「うん…言った方がいいかなあ」

「青子が快斗に言うのはいい？」

「黒羽くんから新一に流れる可能性があるんじゃない？」

「口止めする…!…!」

）

ぴゅ

「よお、青子。パンクしたか？」

『大丈夫だよーだっ！！蘭ちゃんと仲良く真面目ーにやってるよ』

「ははっそうか」

『あのね…そんなことより…』

「ああ…そうか。わかった。わかったって…！しっけーよ。言わねーから。じゃな」

無言電話か…

快斗はきつた電話をみつめる…

「黒羽！！オメーこれから授業じゃねえの？」

「携帯見つめてる場合とちゃうやろ」

「あ…そうだった」

慌ててまだ湯気のたつオムライスを食べ始める。

「…なあ。このまま終わると思うか？」

平次がパスタをつつきながら尋ねる。

「木梨が国本を止める…とは言ってるけどどうだろうな」

「警戒するに越したこたあねーだろうな」

「しかし感心するね。今朝の投函されたベストショット。」

「黒羽…!!」

「なになにー？そら初耳や」

「オメーは知らなくていいんだよ…って黒羽!!」

怒鳴り散らす新一をよそに勝手にカバンから例の封筒を取り出し平次に渡す。

「工藤…お前、ホンマ姉ちゃんと居るとき脳細胞の働きにぶっなるな。」

つけられてたんも撮られたんも気づかなかったんやろ？」

「ああ…まあそれどころじゃなかったと言うか…」

バツが悪そうにそっぽを向き赤く染まる顔を隠した。

「おっちゃんにも見られて怒られるし…ついてねーよな」

「マジか。彼女の父親にっつてのは気まずいな。しかも毛利探偵は蘭ちゃん溺愛だしなー」

「同棲への道のりがまた険しくなっただんちゃう？」

新一がふてくされる様子が面白くて仕方ないのか2人は楽しそうに

言葉をなげかけた。

「でもさ、現実的に考えて新一は事件で駆り出されて蘭ちゃんがある家に1人……ってことを考えると毛利探偵の気持ちもわかるな。」

今回みたいに新一のファンがやつかんで嫌がらせしても危ねーし」

「せやなあ。セキュリティを強化するなりせんと工藤も推理どころやないやろ。」

「そこでだ。俺と青子も工藤邸に住み込むってどうだ？」

「ついでに俺と和葉も」

2人は身を乗り出した。

「却下！！！！！」

「そう簡単にはいかへんか……」

「ただでさえ連日人ん家に入り浸ってんのにまだ要求するか。」

新一はそう言って残りのパスタを平らげた。

14・コンビニ逢瀬(前書き)

少しずつ核心に近づきます

14・コンビニ逢瀬

翌日、ゼミは休講との連絡がきた。

教授の都合によりだったが

昨日の一件があつてからの休講はありがたかつた。

午前中の授業だけで帰宅できることに気楽さを感じながら
さて、夕方までなにをしよう。と新一は悩む。

推理小説を読むのもいいが夢中になって日が暮れてしまつては蘭に
会えない。

こんなときに限つて快斗も平次も授業だ。

「工藤くん!!」

後ろから声をかけられ振り向くと小走りに美緒がやってくる。

「よお。今日は国本さんは?」

「あー…気にしないであげて。今日はとても学校に来る気分じゃない
みたいで…」

「オレのせいだよな」

「あ!!そんな意味じゃないの。あたしがお願いしたんだから工藤

くんは気にしないで!!」

2人は駅に向かいながらそんな会話をする。

「沙耶は真面目だから。真面目で一生懸命だから周りが見えなくなっちゃうんだよね。そこが長所であり、短所であり…」

ふと一瞬美緒が遠い目をする。

「早く立ち直ればいいけど。」

「そうだな」

電車に乗り込みながら

新一は見なかつたふりをして微笑む。

「蘭さん、明日までだっけ、合宿。寂しいね」

「まあな。夕方少し会っけど一瞬だしな。」

「ふーん、天下の探偵も彼女に会えないのが寂しいんだ。幼なじみだからずっと一緒だったんでしょ？余計に離れるの寂しいね」

美緒がいたずらに笑う。

つつこんで聞いてくる様子や話しやすさ、テンポに高校時代の悪友を思い出しながら会話を続けた。

「まあな。思えば本当にずっと一瞬だな。」

「ずっと一緒にいるのが”当たり前”なんでしょ？それに恋を錯覚

してることはあり得ないの？」

表情はよめなかった。

あまりにも自然に言われたから。

「どういう意味だ？」

「深い意味はないよ。ただ、なんで工藤くんみたいな人が幼なじみで手を打ったのかわかって」

笑顔ではあるが瞳は真っ直ぐだった。

新一は少し眉をひそめる。

「なんてね 冗談だよ。蘭さん素敵だもん。あんな子が小さいときから側にいたら惚れちゃうよね」

につこりと笑顔を見せて美緒は一駅で電車を降りた。

「蘭さんによろしくね。また明日！！」

「明日は土曜日だからオレは休みだよ」

「そっか。じゃあね」

電車が閉まったが美緒は手を振り続ける。

右手をあげて返事をするが新一は笑顔を見せることはなかった。

結局、小説を読むことなく先日蘭が持ってきたDVDを見ている間

に快斗が家にやって来た。

「珍しいな、映画を見てるなんて。しかもラブストーリー？」

机の上にあるケースを見て快斗が言う。

「こないだ一緒見てたんだけど案の定オレは眠りこけて怒った蘭が
”いい話だから見て”って置いてったんだよ」

「いい話だったか？」

「…記憶にねー…」

やはり寝たらしい。

たまには歩くかと新一と快斗は少し距離のある蘭と青子の学校付近まで徒歩で行くことにした。

「なあ…俺さ、西校に潜入してからずっと考えてたことあんだけどよ…」

今まで何も話していなかった快斗が口を開いた。

「多分、オレも同じことを考えてるし、服部も少なからず考えるだろうな」

まっすぐ前を見据えて快斗に答える。

「工藤くん！！快斗おー！！」

コンビニが見えてきた頃に青子の明るい声が響く。

「青子ちゃん！！近所迷惑よ」

「あ、そっか……」

コンビニから蘭が出てきた。

にっこりと手を振る蘭に駆け寄りつつとした。

「きゃあああ！！！！！！」

青子の声が響く。

「蘭　！！！！？」

女が蘭にハサミを向けて近づく。

15・コンビニ逢瀬？

蘭と青子がコンビニに入ったのを電柱から確認していた女がいた。

手にはハサミを持って。

出てくるのをずっと待っていたのだ。

「蘭ちゃん!!」

青子が蘭の前に出ようとしたのを蘭は制した。

「あなた…東都大の…」

「国本!!なにやってんだよ
思わず快斗も叫ぶ。

「どうして…今までの彼との時間も共有して…これからも側にいる
のよ。ずるいじゃない」

目を真っ赤にした沙耶は蘭に言う。

「服も髪型もあなたに似せてもあなたがいる限り敵わない。」

一晩中泣いたことは彼女の腫れた目元から想像がついた。
蘭は静かに沙耶を見ていた。

「お願いします。彼と…新一くと別れて…」

「蘭!!」

「蘭ちゃん!!」

沙耶が蘭へとハサミを向けて飛びかかった。

「ごめんなさい、痛かった?」

蘭は謝る。

「……………」

少し頭が冷えた沙耶はコンビ二脇の椅子に蘭の手によって座らされた。

沙耶が飛びかかったものの蘭は避けて沙耶を取り押さえたのだった。

「言う機会なかったけど、蘭は空手やってんだよ」

落ちたハサミを拾い沙耶に告げる。

「よく見ればこれ…髪切りハサミじゃねーの?」

マジマジとハサミを見て快斗が言う。

「…蘭さんを傷つけるつもりはなかったの。自慢の長い髪を少し切っ
てしまえばいいって…工藤くんも蘭さんの髪が短くなればあたし
を見てくれると思って…」

顔を覆って泣きながら言う沙耶に一同ため息。

「…そう思ってカッターやナイフじゃなくて専用ハサミってのが真
面目さを醸し出してて可愛いな」

ハハハ、と快斗は笑うが新一は笑えなかった。

「だいたい蘭の髪を切ったってオレが蘭と別れるわけねーだろ。ち
ったあ冷静に考えるよな！！一歩間違えばケガしてんだぞ！！」

「新一…もう、いいから」

蘭に言われて新一も黙る。

蘭は沙耶の顔を覗き込んで優しく言葉をかけた。

「国本…さん？あたし、なんて言っていていいかわからないけど。
新一は譲れないわ」

逆に沙耶を刺激するかもしれない、と思いながらも蘭は穏やかに続
けた。

「今まで確かに新一と過ごしてきたし、これからも過ごしたいと思
ってる。」

それを国本さんは憎いと思うかもしれないけど…でも同じことをこ
の前まであたしも思っていたわ。

あたしは新一の大学の様子や交遊関係を知らない。
国本さんたちに嫉妬したわ。」

沙耶は顔をあげて涙を拭った。

「ごめんなさい…あたし…冷静にいられなくて酷いことを…」

我に振り返り頭も完全に冷静さを取り戻した沙耶はガタガタと震えた。

青子は先ほど買い物をしたコンビニ袋からジュースを取りだして沙耶に渡す。

「誰もケガしなくてよかつたね」

につこり笑いかける青子からジュースを受け取り少しだけ沙耶は飲んだ。

「じゃあまあこれで心配事は少し解決か？」

「そつえば…蘭ちゃんの無言電話も国本さんだったの？」

快斗と青子の会話に沙耶の顔色が変わる。

「あ…あたしそんなことしてない…本当よ…」

「国本さん、落ち着いて。」

蘭は沙耶の背中を撫でる

「じゃあ無言電話の犯人は別か…国本、写真なんか新一の家に投函したか？」

「写真…？あたし方向音痴で…1人じゃ工藤くんの家行けないから…こないだ偶然を装って一緒に登校出来たらと思って米花駅まで行ったけどやっぱり道わからなくて…」

「だってよ、新一…」

「これでわかったな…オレらの考えは当たってたってことが」

新一は腕を組み快斗と少し話したあと蘭に向き合った。

「で？無言電話ってなんのことだ？」

「あ…大したことじゃないんだけど…数日前から…」

「なんでオレに言わないんだよ…」

「心配かけたくなくて…」

シユンとなる蘭になにも言えなくて新一は深く深くため息をつく。

「あ…やばい！！学校戻らなきゃ！！」

青子が慌てて言う。

「あ！！忘れてたけど合宿中だったんだ！！」

バタバタと蘭と青子は荷物を持ち駆け出す。

「新一！！後でメールするね！！」

「快斗！！青子もメールするから！！それと…国本さん、送ってあげてね」

そう叫び2人は学校に戻っていった。

「…女ってたくましいな。」

「ああ…こんな騒ぎがあっても合宿戻ってくもんな」

新一と快斗は小さくなる彼女たちの背中を見つめながらそんな話をし、快斗はそのまま沙耶を送って行った。

16・西高での証言

国本沙耶は写真を投函していない。
蘭に無言電話もかけていない。

新一にはそれは想定内の範囲内だった。

とにかく今日、蘭に怪我もなくてよかった。

だが、自分のせいで蘭が危険な目にあい、嫌な思いをしているという事実がうらめしい。

しかも今日だって自分はなににもできなかったのだ。

「なにをやってたんだ……オレは」

手にしていた小説を閉じベッドに横になる。

やはり決着をつけるなら、こちらから攻めなくては。

天井を見つめて決意した。

翌朝早くから目暮警部から連絡があった。

先日、新一と平次が解決した事件のことで少しだけ時間が欲しいとのことだった。

『お昼過ぎには帰れるからどこかでお茶でもーって思ったけど、やっぱり事件なのね、名探偵さん』

「……………すみません。」

『じゃあ荷物置いたら新一の家でご飯でも作ってようかな。最近ちやんと食べてた?』

「昼間は外食してたけど夜はまあまあキッチンとやってたよ。わりいな…迎えに行こうと思ってたんだけどよ」

『平気!! 目暮警部たちによろしくね。いつてらっしやい』

ひきとめる様子もない蘭の声に少しの寂しさを感じながらスーツに腕を通す。

今が10時…用件にもよるがそんなに時間もかからないだろうと時計をみながらぼんやり考える。

探偵業は好きだ。

だがこうして恋人との時間を削られるとどうしてもやりきれない気持ちが生まれてしまう。

それでも現場に足を向けられるのは蘭の後押しと”いつてらっしやい”の裏にある”待ってるからね”の言葉にあると新一は思っていた。

外に出て鍵をかけ、ポストを覗く。

今日は封筒は…ない。

「…タベそないなことがあったんか…」

警視庁に既に来ていた平次に夕べの話をした。

「ああ。国本は黒羽が送って行ったんだけど…まああの様子じゃ今後なんもしねーだろ」

「真面目な子やからなあ。ほんまに”コレ”ってなると間違った道でも真つ直ぐやからなあ」
しみじみと平次はうなづく。

「ああそついや…黒羽が西高潜って得た情報元に考えたんやけど…」

「…3人考えは同じだ」

「木梨美緒…やる？」

快斗と青子が卒業生から得た情報はこうだった。

「国本さん？…ああ、沙耶ね」

「周りが見えなくなるというか…そういう傾向ありますか？」

快斗が尋ねた。

「そうだねー…まあ確かにちょっとあるかもね。でも悪い子じゃないよ、頑張りやさんの努力家だからさ。空回りすることもあるけど、何事も一生懸命だから」

「へー…じゃあ例えは好きになった男の人に彼女がいても奪っちゃえ！…みたいのは？」

「あ…青子…もう少し言葉選べよ」

快斗はすばり聞く青子に冷や汗をかき隣で苦笑いした。

「いや？そんなタイプじゃないと思うけど…でもほら、あの美貌じやん？知らず知らず人の彼氏を惚れさせちゃうこともあったりしたけどね」

「ああ…親友の木梨さんとか？」

快斗は美緒の発言を思い出した。

「そうそう。大変だったんだから…あの2人。あたしあの2人と中学も同じなんだけどさ。」

中2のときに沙耶が転入してきて、あの美貌に加えて努力家。成績優秀の沙耶に美緒の彼氏はベタ惚れ。美緒と別れて猛アタックしたのよ」

「でも結局、国本さんもその人と付き合ってたんでしょ？」

「んー…付き合ってたっていうか、彼のアタックが凄すぎて仕方なくって感じよ。試しに1週間付き合ってたって感じで。だからその期間終わったら無理やり説得して別れてたよ」

快斗は頭のなかでパズルのピースがはまるように2人の関係性が見えてきていた。

「でも美緒はずっと沙耶をライバル視してたんだよ。だから高校入って仲良くなつたのにビックリした」

「ちなみに木梨ってどんな人なんですか？」

「普通の子よ。気が強くてプライドが高いけど根はイイコよ。友だちも多いしね。ただ…」

「ただ？」

「あの子も周り見えなくなるタイプだからなあ…」

時を同じくして青子も西高でのことを思い出していた。

「…快斗は木梨さんが怪しいって感じだったけど…証拠もないし理由が青子にはわからないんだよなあ…。もつとも、木梨さんなんて会ったことないけどさあ…」

荷物を整理しながらぶつぶつと独り言をいう。

夕べあんなことがあったが、無言電話は着信拒否をしたこともあり、蘭は久々に携帯の着信に怯えることがなかった。ただ、犯人は誰なのか…蘭は気にしていない素振りをしているがそれが本心でないこ

とは青子はわかっていた。

「あ…蘭ちゃん。工藤くん、なんて？」

「浮気相手とデートだって…」

「事件に駆り出されちゃったのかあ」

青子は蘭と苦笑いした。

17・彼女が動く(前書き)

お正月投稿できませんでした(汗)

そろそろ終盤!!

17・彼女が動く

「あー…2泊3日、よく勉強した!!」

「明日休んで月曜日から試験だね」

伸びをしながら教室を後にする青子と蘭。

「あ…あれ黒羽くんじゃない?」

「ほんとだ!!快斗ー!!」

「荷物持ちに来ましたよ、お嬢さん方」

そう言ってポストンバッグを2つ、快斗は持った。

「蘭ちゃん、今日は新一のどこ行くんだろ?」

「うん、荷物置いたら夕飯作りに行こうと思って。青子ちゃんと黒羽くんも一緒にどう?」

蘭の誘いに青子は”YES”と返答をしようとしたが快斗が青子の口を手で塞いだ。

「今日はちょっと野暮用があるんだ。」

不適に笑む快斗に少し疑問をもちながら”そう？”と蘭も微笑んだ。

「わざわざ送ってもらってごめんね、ありがとう」

米花駅で荷物を受け取り快斗に礼を言う。

「いーえ。礼なら新一に言って。あいつわざわざ俺に電話してきたんだよ。愛されてるねえ」

「そんなんじゃない」

真っ赤になりながら慌てて否定する蘭を楽しそうに眺めながら快斗と青子は改札を出ていく蘭を見送った。

「で？快斗くん、野暮用って？」

「まだ内緒、俺らも行きますか、青子さん」

荷物を担いで快斗は歩き出す。

青子はそれを慌てて追いかけた。

日が少し傾いたころ

工藤邸に向かう蘭の姿があった。

「やっぱり…なんか視線を感じるな…」

両腕を擦りながら独り言を言う。

あたりをキョロキョロしながら大きな洋館の鍵を開けた。

「はぁー…新一はいつ帰るんだろう」

リビングで1人伸びをしてキッチンに向かおうとした。

ガチャンッ

玄関で物音がした。

「誰？新一？」

なにかが近づいてる気配を感じながら”それ”を確認しようと廊下へつながらるドアに手をかけた。

が、自分が開けるより相手が開けるほうが早かった。

「こんにちは」

ゆっくりと顔をあげてそれが新一以外の人物だと認識した。

「あ…あなた、新一の大学の…」

「木梨美緒よ。よろしくね 蘭さん」

18・対面（前書き）

なんかセリフが多くて…

誤字脱字あつたらすみません。

「なんでココに？」

質問には答えず

お茶の支度をする蘭の姿を横目で見た後、美緒はリビングを見渡した。

「広いね…さすが屈指の推理小説家に女優さん、大学生探偵の住む家だわ」

感心したように頷く。

「質問を変えるわ。国本さんに口出ししてたのはあなたね。容姿を私に似せたり、昨日、コンビにに現れたり…あなたが仕向けたんでしょう？」

「……………」

美緒はゆっくりと視線を蘭に向けた。

顔色を変えることなく携帯を一瞬確認して蘭は美緒を真っ直ぐ見据えた。

「狙いは…新一？」

問いかけに一瞬美緒が反応した。

「なんで？あたしがやったなんて証拠ないでしょ」

「快斗さんと青子ちゃん、あなたたちの同級生に会ってきたんだって。」

笑顔だった美緒の表情が変わった。

「国本さん、真面目な人って聞いてたわ。でも、行動力があるようには見えなかった。西高に行ったときも部活の後輩たちにあなたたちのこと聞いて回ったらしいけど……」ミスコンの人”って印象だけ目立つ行動派ではなかったのね」

「そうね。沙耶は文系。頭はいいけど行動派ではないわね」

美緒はソファーに腰をおろした。

「でもそれだけで犯人はあたしだって？」

美緒はにっこり笑う。

「……視線、気づいてたよ。あなたの新一を見る視線。」

「え……？」

「国本さんも授業中新一を見てた。でも隣で気づかれないように木梨さんも見てた。それに快斗くんは気づいてたみたい。だから最初から行動力のなさそうな国本さんの近くにいたあなたを疑ってたみ

たい。」

「……………そう」

「あと、お弁当。学校で”作ってきた”って話を出したのあなただつて。わざわざ言い出したってことは出したい理由があつたんでしょ？」

もちろん、新一に食べてもらいたいってこともあつただろうけど”国本さんと新一がトラブる”ってのも欲しかった。

そして泣きじゃくって冷静じゃない国本さんに何かを吹き込んだ。違う？」

蘭が優しい声で話をしていた間、美緒は真っ直ぐな瞳で蘭を見ていた。

一通り話を聞いたあと、深くため息をついた。

「中学のとき、付き合ってた人がいたわ。

沙耶は悪くないのは分かつてる。頭では分かつてたけど彼が大好きだったから感情が追いつかなくて…しかもすぐ別れたのがより許せなかった」

「でもそれは…」

蘭が口を挟んだが美緒は首を振る。

「うん、分かつてる。彼が無理言って付き合ったことも。でも、冷

静にいられなかった。

沙耶に負けたくなくて沢山勉強したわ。だから同じところを受験した。

そして高校生になってミスコンがあることを知ったわ。負けたくなくて頑張った。でも、1、2年のときは惨敗。

少し興味が出てきたから沙耶に近づいたわ。話かけたとき凄く嬉しそうだった。

たぶん、彼を取ったこと気にしてたんだって思ったわ。この子はイコなんだって思った。

なるべく沙耶と一緒にいたわ。ご飯も食べに行ったり、買い物も。そうやって食生活、メイク、健康法を盗み出した。

でも結局3年では1票差で負けたわ。所詮沙耶には勝てないんだと思った。」

蘭は少し寂しそうな目をした美緒にお茶をすすめた。

「…ありがとう」

「国本さんに近づいたのはただそれだけの理由？」

「ええ…最初はミスコンの為だけだった。

でも知っちゃったの。沙耶が工藤新一のファンだって…」

そう言う美緒の目があまりにも真剣で真っ直ぐで蘭は少し怯んだ。

「自分たちが受験する大学がこの近辺で最高峰。確実に工藤新一も受験するだろうとあたしは確信してた。

だから沙耶から離れないって決めた。

工藤くんだけはとられたくなかったの。

でも…あなたがいた。」

「…木梨さん…」

「沙耶をとことん利用してやろうと思った。協力するふりをして工藤くんに話しかけたり、沙耶の隣で印象付けたり…
そして沙耶を使ってあなたと工藤くんを離そうとしたわ」

「国本さんはあなたを信用してたのよ？」

「信用？本当にそうかな。どこかいつも沙耶はあたしをバカにしていたように思うわ。」あなたはあたしより下なのよ”って。”あたしに意見しないで”って。

だからあたしは沙耶に指示なんてしてない。

”こんな手段があるけど使わないで”って言い方をしていくつかの方法を提示しただけよ。

”工藤くんにも好みがあるんだからあなたじゃだめよ”って言ったら案の定沙耶は蘭さんみたいな容姿になろうとした。

”蘭さんがいるかぎりあなたを見ないわよ”って言ったらハサミを持ってあなたに襲いかかった。

扱いやすい真面目な子だったわ。

沙耶が心配だつて言って黒羽くんや工藤くんに近づけば疑われないと思っただけど結局だめだったか…」

「悪いことはいつかバレるのよ。」

きつと国本さんはあなたを微塵も疑ってないわ。

今ならまだ何も彼女には言わない。戻れるわよ、彼女と友達に」

蘭が優しく諭すように話しかけるがお茶を飲み干し美緒は鋭い目付きで蘭を睨んだ。

「戻らなくていい。それに最初から友情なんてなかったわ。工藤くんを手に入れるための道具に過ぎなかった。」

「木梨さん……」

「ねえ、蘭さん。工藤くんをあたしに頂戴。」

18・対面（後書き）

意味わかったかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4171z/>

彼の特別

2012年1月4日07時50分発行